

=研究ノート=

留岡幸助日記の書誌的考察

Bibliographical Study of Kōsuke Tomeoka's Diary

関 口 寛

Hiroshi Sekiguchi

留岡幸助（1864-1934）は、近代日本を代表する社会事業家である。彼が遺した膨大な日記は、現在、北海道家庭学校（紋別郡遠軽町）で保管されている。当該資料には、彼が関わった監獄改良や感化教育をはじめ、欧米の社会事業の視察や研究をつうじて日本にもたらされた専門的知見にかんする詳細な事項が記されている。本稿は、当該資料の書誌的事項について明らかにするものである。

Kōsuke Tomeoka (1864-1934) was a pioneering social worker in modern Japan. His diary, housed at Hokkaido Home School in Engaru Town, Monbetsu Conuty, includes information on Tomeoka's involvement in prison reform and reformatory education, as well as his extensive knowledge of social work practices in Europe and the United States that he brought to Japan. This study clarifies the bibliographical aspect of this material.

はじめに

留岡幸助（1864-1934）は、明治中期から大正・昭和初期にかけて活躍した当該期を代表する社会事業家である。キリスト者の彼は、1888年に同志社を卒業後、91年に北海道空知集治監教誨師となり、アメリカでの実地視察・遊学を経て99年、東京・巣鴨に感化院・家庭学校を開設、1914年には北海道紋別郡・遠軽村社名淵に同分校を設立した。また内務省囑託として報徳・地方改良運動や感化救済事業、部落改善・融和事業に携わる全国の指導者に専門的知見を教授し、また全国各地を実際に巡回視察して人々の指導に当たった。

留岡は生涯を通じて膨大な日記や手帳を書き残した。留岡のメモ魔ぶりは有名で、ともに社会事業の発展に尽くした生江孝之が「感じた事、参考になる事は何んでも手帖に書く。だから手帖の多かった事も天下無類であった。（中略）陸上では手帖を離した事はない。少し大げさに云ふと一日一冊使ふ。それだけでは天下に比類ない⁽¹⁾と云はれて居る」と舌を巻く程であった。現在、留岡が遺した日記と手帳は北海道家庭学校に所蔵されている。300冊を超えるその原簿は、「天下に比類ない」ほどの研鑽に努めた留岡の人生を彷彿とさせる。

この資料群（以後、資料群を総称して「日記」と記す）は、1875（明治8）年から1929（昭和4）年にわたる期間のものが確認されており、彼が関わった幅広い領域の関連分野における第一級の史料である。留岡は自らが視察や聞き取りを通じて修得した知見を「手帳学問」と呼び、以下のように述べている。

『手帳学問』は著者が二十年間、我日本全国を隅から隅まで旅行して、或は学者に、或は商工業者に、或は農業者に、或は宗教教育者に、或は華族に、或は特殊部民^マに、或は芸娼妓^マに、或は乞食に、或は軍人に、或は官吏に、あらゆる社会階級の人々に面会し、或は市町村長等を訪問して得たる所の材料、談話、或は河海を跋涉して得たる所の材料、感ぜし所の感想を、年度の順によりて隨時筆を執りたるもの也。故に各社会状態の事実を捕へて

之を叙録し、時に或は触目の光景、起り来りたる感想を記述したるもの、
故に読者は之によりて得らるゝ所或はなきにしもあらざるなり⁽²⁾

本稿は、筆者も参加する「日記」を用いた共同研究において判明した書誌的な事実を明らかにするものである。⁽³⁾以下でも述べるように、同史料についてはこれまで諸々の関係者や機関によって利用に向けた整備や公刊の努力が行われてきた。だが実際に資料の解析に取りかかり、複数存在する版を対照させてみると、相互の不一致や対応関係に不明な点が多く立ち現れ、いずれの資料に基づいて研究を進めればよいのか困惑する向きも少なくないと思われる。そこで共同研究をつうじて得られた知見を共有し、当該資料にもとづいた関連分野の研究が今後いっそう盛んになることを願うものである。なお文中の人物への敬称は略した。また引用箇所には現在の人権感覚からは不適切な差別的表現が使用されているが、歴史資料であることを考慮し、原文のままとしたことをお断りしておく。

I 諸版の「日記」と来歴

「日記」を用いた研究はこれまでも発表されてはきたが、その数は決して多くはなく、また「日記」の書誌にかんする研究はほとんど存在しない。管見の限りでは、同志社大学人文科学研究所（以下、人文研と略記）が所蔵するキリスト者関係資料のマイクロフィルムについて西澤献が解説と目録を作成した論考で「留岡幸助日記」を取り上げたことに止まる。⁽⁴⁾

この理由としてまず「日記」の量が膨大であり、かつ癖の強い字で記された内容の判読が困難であったことが挙げられよう。加えて、「日記」には複数の版が存在し、相互の照合作業が極めて困難である。例えば翻刻版『留岡幸助日記』の内容を原資料で確認しようと考えた場合、「日記」原本は北海道家庭学校の所蔵であり、紋別郡遠軽町の同校に調査に赴くことは近郊在住でない限り

費用・時間双方の面でコストがかかる上、同校との資料調査の日程調整も容易ではない。よって現実的には同志社大学人文研が所蔵するマイクロフィルム版およびプリント製本版を利用するケースが多くなると推測される。だが同志社人文研所蔵の複写版資料を用いても判明しないことが存在し、原資料での確認作業が必要となる場合も少なくない。

そこでまず複数存在する「日記」の版が製作された経緯について概観しておこう。「日記」は、これまでに以下の6種類の版が保管・製作されてきた。

- ①「留岡幸助手帖」1875-1929年（手稿原本、北海道家庭学校所蔵）
- ②「留岡幸助日記・手帖」1974年（マイクロフィルム版、同志社大学人文研所蔵）
- ③「留岡幸助日記・手帖」1975-1976年（②のプリント製本版、同志社大学人文研所蔵）
- ④「留岡幸助手帖／浄書原稿」1976年（手稿翻刻版、北海道家庭学校所蔵。
以下「浄書原稿」と略記）
- ⑤『留岡幸助日記』矯正協会、1979年（翻刻刊行版、以下『日記』と略記）
- ⑥『留岡幸助日記』補正加筆版、1982年（大泉栄一郎校閲、北海道家庭学校所蔵）

筆者が「日記」について知ったのは十数年前、⑤翻刻版をつうじてであった。その後、当該資料について調べる中で人文研が作製した②マイクロフィルム版と③プリント製本版の存在を知った。さらに2018年には北海道家庭学校で①「日記」原本を調査する機会に恵まれ、その際、翻刻版『日記』刊行のために作成された④浄書原稿、また翻刻版刊行後にさらに校閲を重ねて作成された⑥刊本補正加筆版の存在を知った。

通常は、⑤を通して当該資料に触れるケースがほとんどであろう。さらに原資料に当たり翻刻版に採録されていない内容を確認したい場合や、より専門的

な研究に着手する場合、居住地にもよるが同志社大学人文研で②③を閲覧し、原資料の内容を確認するケースが多いと思われる。そのため、北海道家庭学校が所蔵する④⑥については、その存在自体がこれまでほとんど知られていない。こうした事情を考慮した上で、以下、各版の書誌について概説する。

①「留岡幸助手帖」1875-1929年（手稿原本、北海道家庭学校所蔵）

当該資料は、これらを整理・編纂し一群の資料にまとめた留岡清男の取組によって世に知られるようになった。留岡の四男で北海道家庭学校の第4代校長に就いた清男は、晩年には毎朝三時間半を「日記」の精読と整理にあてる生活を送りながら、その内容を紹介する記事を家庭学校機関誌『ひとむれ』で連載するようになる⁽⁵⁾。そのなかで当該資料の翻刻出版を構想するようになったこと、その動機について「亡き父の遺した膨大な日記（手帳）を整理し、それを通じて、亡父の発心と、それが修練と経験とを積みかさねながら広がっていった生い立ちを、跡づけてみようと思ひ立⁽⁶⁾」ったと記している。

現在、当該資料が一般に「日記」と呼称される理由は、清男がこの名称を使用し、これが翻刻出版される際にも踏襲され、多くの研究者が使用することになったためと推定される。ちなみに現在の手稿原本は①「留岡幸助手帖」として管理されており、この名称は2002年に同校で仮目録作成時に採用されたものである。「手帖」が用いられた理由については、実際の内容として日記よりもメモ類の記事の割合の方が多いことを考慮したためと思われる。

なお、「日記」には家庭学校で生活する生徒についての同校教員による観察記録が含まれている⁽⁷⁾。個人的な記録であるはずの「日記」に幸助以外が執筆した文章が含まれることに違和感を抱く向きもあることだろう。これらが「日記」に組み込まれた経緯については、清男による解説が残されている。「留岡幸助が遺した日記・手帖の中には、意外に家庭学校についての記事が見当たらない。畢世（ママ）の事業として始めたのであるから、ことごとく苦労や苦心が記さ

れたり、理想や努力が述べられたり、知友の同情や支援が語られたりすることが多かったに違いないと思うのである。ところが、そういった記事が日記・手帖の中に意外に少いのは、恐らく日記・手帖が散佚してしまったからではなかろうか」「著書やパンフレットには家庭学校が紹介されているけれども、〔日記には；筆者註〕家庭学校の日常の生徒と教育との実態について触れることは先づかないといってよろしい。幸に、全職員がそれぞれ担当する「生徒観察記録」なるものが遺っているから、その中から幾人かを選んで、家庭学校の日常の生活と教育とをみてみようと思う。留岡幸助の書いた日記ではないが、留岡幸助がそれを読み、それについて感想を付記しているから、「留岡幸助日記」の中に採録するのは適当であろう⁽⁸⁾」。

後の④でも触れるように、当該資料の翻刻出版は同校教員の20年越しの労作の結実として達成された。上記の判断にはこうした関係者の関心に対する配慮という側面もあったのかもしれない。ともあれ、「留岡幸助日記」と総称される資料は清男による編纂によって成立したこと、よってその視点や意向が深く関与していることは重要である⁽⁹⁾。読者はこうした事情を理解した上で当該資料に当たる必要があるといえよう。

②「留岡幸助日記・手帖」1974年（マイクロフィルム版、同志社大学人文研所蔵）

③「留岡幸助日記・手帖」1975-1976年（プリント製本版、同志社大学人文研所蔵）

同志社大学人文研では1974年から3ヶ年の予定で5つの共同研究プロジェクトが発足した。そのうちの第1研究（キリスト教社会問題研究）ではそれ以前の3ヶ年に取り組みされたプロジェクト・チームが再編成され、その一つとして「日本組合基督教会の成立とその諸活動」（組合教会研究）が開始された。この組合教会研究の発足と軌を一にして「留岡幸助研究」がサブグループとして始められ、留岡幸助の社会的実践に関する文献資料の調査収集ならびに研究報告

が行われた。この共同研究は後に『留岡幸助著作集』全五巻(同志社大学人文研、1978-1981年)の刊行という成果をあげた。またこの間、北海道家庭学校から留岡清男、谷昌恒の両校長が同志社を訪問するなど、両校の交流が活発化した。

共同研究の一環として、1974年7月末から8月初旬にかけて人文研研究員が北海道家庭学校を訪問し、同校に収蔵される留岡幸助の日記・手帳のマイクロフィルム撮影を行なった(②)⁽¹⁰⁾。同校ではこのとき既に資料の整理と翻刻出版に向けて浄書原稿の作成作業が進められており、同志社チームはこの時点における整理番号に沿って撮影作業を進めた。

その際、閲覧者の利便性を考慮し、各簿冊の冒頭には白紙に整理番号とタイトルをマジック書きしたコマが撮影された。当該タイトルは原簿の巻頭頁に留岡幸助自身が付したものがあられる場合はそれを採用しているが、全体の三分の二あまりの原簿にはタイトルが付されていない。この場合、多くのケースではタイトルを「無題」としたが、一部には撮影時に作業担当者の判断でタイトルを付したケース、あるいは家庭学校教員が浄書原稿を作成した際に付したタイトルを参照し採用したケースなどが混在しており、一貫していない。

マイクロフィルム版は清水光芸社で製作され、全21巻のマイクロフィルムリールとして同年中に納品された⁽¹¹⁾。また製作の翌年から2年かけて紙焼き現像版を製本したプリント製本版(③)が製作され、研究用に公開された。②③ともに現在は人文研に申請書を提出し、許可を得ることで閲覧可能となっている。

- ④「留岡幸助手帖／浄書原稿」1976年(手稿翻刻版、北海道家庭学校所蔵)
- ⑤『留岡幸助日記』全五巻、矯正協会、1979年(翻刻刊行版)
- ⑥『留岡幸助日記』補正加筆版、1982年(大泉栄一郎校閲、北海道家庭学校所蔵)

留岡清男が翻刻出版を目指して着手した資料整理と原簿の浄書作業は、北海道家庭学校の教員が17年を超える歳月を費やして完了した(④)⁽¹²⁾。浄書原稿

は、①「留岡幸助手帖」の全部ではないものの大部分を翻刻しており、総字数8,410,400字、二百字詰め原稿用紙42,052枚に上る。読み間違いや作成年に關しての誤りを含むとしても、当該資料を解説する上で有益な参考資料であり、将来的に研究利用にむけて整備されることが望まれる。

こうして出来上がった浄書原稿のなかから、出版可能な字数、資料価値などを考慮した上で、『留岡幸助日記』刊行に向け編集作業が進められた。だがライフワークとして事業に取り組んだ清男は最終段階で体調を崩し、当該事業の完成は周囲の協力者へと託された。清男が病で倒れた後は、山本克郎、中川収ら札幌の編集委員が事業を牽引する役割を引き継ぎ、1979年、『留岡幸助日記』全五巻(⑤)が矯正協会から発刊された。清男は父幸助の日記の刊行を待たず、1977年2月この世を去った。

『日記』(⑤)は今日、当該資料を読む上で最も手に取りやすい文献である。しかし出版事業予算の制約から全てを収録することは不可能であったため、ここに採録されたのは浄書原稿全体の40%強に過ぎない。収録された記事についても実際の日記・手帳には存在する文章が注記なしに数段落にわたって削除されているケースがしばしば存在し、採録から漏れた内容・記述も多い。

また原資料の日記・手帳の記述は断片的なメモ書きが大部分を占めており、通読可能な文章の形態にまとめるため相当な編集の手が加えられていることが確認されている。例えば、編年順に並んでいる日付入の記事が、実際には複数の別の記事をつなぎ合わせてまとめられていたというケースも少なくない。また留岡の論説として翻刻された記事が、前後の文脈から他人の講演内容の筆記と推定される場合や、部落問題に關係する記事などでは今日の人権感覚に照らせば不適切な表現や、記事そのものを削除した箇所も散見される。⁽¹³⁾こうした理由から、当該資料にのみ依拠して研究を進めることにはリスクが潜んでいることに注意する必要がある。留岡幸助の人生と事業、その資料の意義を広く周知した功績を確認しつつも、原典との比較・精査の重要性を強調せねばならない。

なお『日記』刊行後、こうした点を踏まえ同校教員の大泉栄一郎は3年余りの歳月をかけ、同書の記載と収録された日記・手帳・書簡などの原本を照合、誤字の修正、□（欠字）や浄書での「書き落とし」箇所⁽¹⁴⁾の修正を行い原資料に忠実な補正版を作成した（⑥）。さらに同版では留岡が記した聖書や漢詩の引用典拠、『日記』採録記事の出典（日記・手帳の原簿）の整理番号と頁数が加筆されている。同版は現在、北海道家庭学校で保管されており、原典確認をする際の便宜を与えている。

II 整理番号とタイトル

本稿末の表3は、当該資料に付された整理番号にもとづき作成した資料リストである。この整理番号は北海道家庭学校の第4代校長を務めた留岡清男により付された。原本番号プラス枝番号からなり、原本番号は1～288、枝番号は存在しないものから最大で6まで割り振られている。⁽¹⁵⁾

清男はこれらの番号を付すことで原簿を作成年の昇順に並び替えていった。⁽¹⁶⁾だが留岡幸助が備忘録的に使用したメモ帳の多くは、その年代を特定することは容易ではなく、また彼は同時に複数の日記・手帳を持ち歩き、テーマや用途によって使い分けていたため、この作業は多大な困難を伴ったものと思われる。実際、今日の観点から検証すれば作成年推定の誤りが散見される。⁽¹⁷⁾

枝番号が付された経緯については、複数の要因が考えられる。当初、枝番号はNo.94、130、136、137、156などの生徒観察関係およびNo.135の財務関係など、同一ないし統一性の高いテーマの簿冊に配したと思われる。これら以外の枝番号は、いったん原本の通し番号を付した後、新たな簿冊が見つかったり、正確な執筆年が新たに判明するなどの理由により変更が必要となった場合や、既に原本番号を割り振られた連番の簿冊の間に新たな簿冊を配置したい場合に、資料全体の編年順の一貫性を保つために付したものと推定される。⁽¹⁸⁾統一性を欠く

枝番号の配し方からは、晩年まで執筆時期の特定という困難な作業に取り組んだ清男の苦心の跡が窺われる。

次に、「日記」に付されたタイトルについて見ておこう。「日記」には表紙裏の見開きに留岡幸助自身がその冊子のタイトルや番号を付し、自身の所属する機関と住所、氏名（あるいはペンネーム）、新調した日付を書き記したものが約三分の一ある。前述したように、同志社チームによるマイクロ版の製作に際し、撮影作業者は後の整理や利用のことを考え、各簿冊の冒頭に整理番号とタイトルをマジック書きしたコマを撮影している。ただし原資料には系統だったタイトルや番号が付されているにも関わらず、その途中の簿冊が紛失したと推定されるケースや、もともと幸助が付したタイトルと番号に一貫性がない場合も少なくない。そのため、マイクロ版撮影時に加えられた簿冊タイトルにはしばしば誤った記載がみられる。⁽¹⁹⁾

Ⅲ 諸版「日記」書誌における総冊数

「日記」については、これまでにみたように様々な版が作成され、研究利用のため公開されてきた。ただし、これら諸版毎の書誌には大きな相違が存在し、利用者を困惑させる要因ともなっている。その最たるものが、「日記」の冊数の不一致であろう。最後に、この問題について考察しておきたい。

これらの版のうち、「日記」冊数にかんする最も古い記述は、人文研チームが北海道家庭学校にて行ったマイクロフィルム撮影の翌75年、この調査報告を掲載した「研究会だより」（『キリスト教社会問題研究』第23号）における322冊である。この後、人文研が発する記録にはこの冊数が踏襲されている。⁽²⁰⁾

これに対し、北海道家庭学校の事業として1979年に刊行された⑤『日記』全五巻では、第一巻所収の留岡清男「序にかえて」（1976年9月の日付入）で、318冊としている。これを受け、『日記』の刊行当時、図書案内や書評記事では

この冊数が用いられ、またその後の多くの研究書などでもこれに従った冊数が紹介されてきた。⁽²¹⁾

同一の原典にもとづき製作、刊行された版に相違があるのは何故か。筆者は2018年10月、北海道家庭学校で①原簿の冊数を調査した。その結果、判明した総冊数は321であった(表3参照)⁽²²⁾。以下、追加の調査も含めて判明した事項、およびそれらを総合し考察した結果を述べる。

まず、北海道家庭学校所蔵の原簿①「留岡幸助手帖」と②同志社マイクロ版(および③プリント製本版)との相違を見ていこう。ここでは、②と③は同じ撮影フィルムから製作されており、同一内容であることを前提に考察を進めることとする。

①と②③を比較するとき、同一の整理番号である No.200 に冊数の相違が存在する。①では当該簿冊は1冊だが、②③では日記が2冊存在している。①②③を付き合わせて検討した結果、②③の No.200 のうち薄い冊子は No.199 の最後箇所を撮影したものであることが判明した。これは②撮影時の作業経緯が③⁽²³⁾作成や冊数確認に際し正確に引き継がれなかったことによって生じたミスであり、その結果、当該 No. には別内容の日記が2冊存在するものとして扱われ、台帳登録されたと推定される。

以上の検討から、冊数計算のミスや前章でみた整理番号の変更があったものの、①②③の総冊数はいずれも正確には321冊であることが判明した。

次の考察は、①②③と⑤の間に存在する書誌の不一致についてである。上にみたように、清男は晩年まで「日記」の整理を継続したため、その過程で新たな原簿の出現等により総冊数に変化が生じたとしても不思議なことではない。実際、同志社チームが北海道家庭学校で「日記」をマイクロ撮影するよりも以前の1970年10月、同校機関誌『ひとむれ』第333号誌上で清男が「日記」の整理状況を報告した際、総冊数を298冊としている。しかし、1974年7・8月の同志社チームによるマイクロ撮影時の整理状況②③と現在の①の間にはごく

一部の原本番号の変更以外、321冊という総冊数を含め大きな相違は存在しない。⁽²⁴⁾よって②③の製作時以後、現在までに総冊数に変化はなかったと推定される。

にもかかわらず、1976年9月の清男「序にかえて」（⑤第一巻）が総冊数を318としていることは、容易には解決できない謎というほかない。表1は「日記」に関連する事項と冊数に関連する記述を時系列順にまとめたものある。

表1 「日記」に関連する事項と総冊数の記述の変遷状況

年号	事 項	総冊数	備 考
1958	留岡清男が「日記」の浄書作業を開始		
1970	留岡清男「亡父 留岡幸助先生の手帳整理」『ひとむれ』第333号（10月）	298	
1974	同志社大人文研、留岡幸助日記を撮影しマイクロフィルム製作 ②	321	
1975-1976	同志社大人文研、マイクロフィルムからプリント製本版を製作 ③	321	
1975	「研究会だより」『キリスト教社会問題研究』第23号（3月）	322	冊数計算ミスか
1976	留岡清男「序にかえて」（『留岡幸助日記』第一巻）執筆（9月）	318	⑤所収
1977	留岡清男逝去（2月）		
1978	『留岡幸助著作集』全五巻（同志社人文科学研究所）刊行		
1979	『留岡幸助日記』全五巻（矯正協会）刊行 ⑤	318	
1994	『同志社大学人文科学研究所の50年』刊行	322	
2018	「留岡幸助手帖」①の総冊数を調査（10月、著者）	321	

実は、①②③と⑤の間には総冊数以外にも複数の相違がある。表2は⑤の「あとがき」に記された各巻の原本番号の採録範囲および対象冊数を、②③の同範囲に採録されている簿冊数と対照したものである（採録範囲の単純な原本番号の数と総冊数が一致しないのは、枝番号を付して整理される簿冊があるため）。これによれば、第一巻が対象とする原本番号1～79の総冊数81、第四巻の207

～267の総冊数61は②③と⑤の間で一致する。しかし第二、第三、第五の各巻では一致せず、これは②③と⑤の間で原簿の管理状況が異なっていることを意味する。つまり、総冊数の上では3冊の相違がある、というに止まらず、新規簿冊の発見や作成時期の検討による整理番号の振り直しといった行為の介在が認められる。

表2 ⑤『留岡幸助日記』各巻の採録範囲の簿冊数と②③同志社複写版の比較

⑤巻数	採録範囲 (原本番号)	総冊数 (含枝番号)	典拠	②③の 総冊数	対照増減数
一	1～79	81	同巻707頁	81	± 0
二	80～148	86	同巻694頁	91	- 5
三	149～206	60	同巻654頁	62	- 2
四	207～267	61	同巻642頁	61	± 0
五	268～288	24	同巻718頁	21	+ 3
対象外	番外・人名簿	6	同上	5	+ 1
合計		318		321	- 3

註：総冊数は、原本番号に枝番号を加えた整理番号の全簿冊数。

先述したように、現在の①と②③の異同も合わせて考えるならば、筆者が2018年の①調査によって確認した321の総冊数は、②撮影時の1974年時点では確定していたと考えるのが自然な解釈のように思われる。その間に位置する⑤の整理状況および総冊数と①および②との間に多くの不一致が存在することを仮に合理的に解釈するとすれば、②の撮影後、清男による整理作業（3冊の「日記」からの除外を含む）が行なわれ⑤の状態となり、その後現在までにふたたび①の整理状況に変更された、とでも解釈しなければならない。だが、かかる作業が行われた可能性は否定できないとしても、限りなくゼロに近いのではないだろうか。

筆者はこの「謎」について、現段階では以下の仮説を提示しておきたい。⑤の各巻「あとがき」に原本番号と冊数によって示された整理状況、および1976

年9月付の⑤第一巻「序にかえて」（留岡清男）に記載された318の総冊数は、1970年10月の総冊数298冊とした報告と1974年7、8月に同志社チームが321冊の原簿を撮影した②の間の、いずれかの時点における整理状況のもとで作成された計算ではなかろうか。その後、さらなる日記の出現等も踏まえて②③や現在の①の321の総冊数の資料群として整理されたものの、清男が闘病生活に入ったため最新の整理状況に更新されないまま⑤の刊行に至った。以上のように仮定すれば、総冊数に関する「謎」も解消する。因みに、清男が体調を崩し闘病生活に入ったのは1975年夏のことである。⁽²⁵⁾『日記』書誌の原稿を作成するに当たり、出版に向けて以前に準備していた各巻の冊数計算が用いられた、ということもあり得ないことではないように思われる。

おわりに

本稿では「留岡幸助日記」の書誌についての解説と考察を行った。これまでに数多くの関係者の手によって作成された諸々の版の特徴を踏まえることで、従来「日記」に触れた人が抱いたであろう不明点がわずかでも解消できたならば幸いである。当該資料は、多様な領域において注目すべき活動を繰り広げた留岡幸助の足跡を検証するのみならず、近代日本の社会事業史、社会政策史、文化史、思想史の研究を進める上で重要なものである。膨大な冊数に記されたことがらには、従来の通説的理解や枠組みを組み替える可能性が秘められているかもしれない。多くの人が資料を手にすることで新たな研究が切り開かれることを期待したい。

付記

本稿脱稿後の2023年9月、共同研究チームで北海道家庭学校を訪問して実施した調査において、留岡幸助の晩年の日記が新たに発見された。詳細については改めて紹介が行わ

れる予定であり、ここでは報告に止める。

- (1) 生江孝之「留岡幸助君を語る」『廓清』第24巻第3号、1934年3月、10-11頁。
- (2) 「日記」No.268、1916年10月。
- (3) 本稿は、JSPS 科研費 JP18H00941「マイノリティの包摂／排除をめぐる生政治：部落改善・融和政策の歴史社会学的研究」（基盤研究B、研究代表者：野口道彦）、JP23H00894「部落問題政策の形成に関する歴史社会学的研究」（基盤研究B、研究代表者：野口道彦）の共同研究の成果である。
- (4) 西澤献「CS キリスト者関係資料の現状」『キリスト教社会問題研究』第67号、2018年12月、1-71頁。
- (5) 留岡清男「覇旅漫録（その一） 留岡幸助先生の『手帳』抄録」『ひとむれ』第286号、1966年11月1日、1頁。
- (6) 留岡清男「亡父 留岡幸助先生の手帖整理」『ひとむれ』第333号、1970年10月1日、5-9頁。
- (7) 「日記」に含まれる生徒観察記録は、No.94-1, 94-2, 94-3, 117, 123, 124, 130-1, 130-2, 130-3, 136-1, 136-2, 136-3, 136-4, 137-0, 137-1, 137-2, 137-3, 156, 156-1, 156-2, 163の21冊である（表3参照）。
- (8) 留岡清男「解説 家庭学校の生徒観察記録」（未定稿）、年月日不明、北海道家庭学校蔵。
- (9) 付言すれば、留岡幸助の日記・手帖の原簿には句読点や符号、番号など清男が付したと思われる書き込みがあり、解読する際には留意が必要である。
- (10) 『研究所報』第10号、同志社大学人文科学研究所、1975年5月、2頁。撮影は同校樹下庵で行われた。同志社から同校に赴いたのは、住谷磐、杉井六郎、井上勝也、村山幸輝の研究員に加え、撮影技師の清水実からなるチームである。『ひとむれ』第385号、1974年7月29日。
- (11) 経年劣化が進んだため、現在はリプロ版（2016年にニチマイ社で製作）を公開している。
- (12) 担当したのは留岡清男、鈴木良吉、横山義顕、寺崎好、岸本種次、大泉栄一郎、森透。留岡清男「序にかえて」『留岡幸助日記』第一巻、8-9頁。なお当該資料には正式な名称が付されていないようであるが、慣例に倣って「浄書原稿」と呼ぶこととする。
- (13) 一例をあげれば、No.149-1では京都市内の被差別部落の詳細な視察記録が記されているが、これを翻刻した『日記』（⑤）第三巻の当該頁では「新平民部落」等の字句が欠落している。このため一読するだけでは記事の内容から留岡の関心を把握するのは困難となっている。
- (14) 大泉溥「本書『留岡幸助日記』の鉛筆「書き込み」について」（未定稿）『留岡幸助

日記』補正加筆版、全巻巻末扉に糊付、2018年11月7日。なお同書は大泉栄一郎の子息である溥氏から北海道家庭学校に寄贈された。

- (15) 西澤前掲論考では、整理番号を同志社大チームがマイクロ撮影時に割り振ったものと考えたためか、番号を「間違い」として修正した箇所がある。
- (16) これらの整理番号については、②③と現在の①の間に変更が行われた簿冊が存在する。例えばNo.17について。当該簿冊は1974年7・8月の②の撮影時には存在したものの、現在の①では欠号となっており、No.83-2として管理されている。また②③の135-3は、①では135-0に移動されている。さらに、No.141とNo.142の番号が振り直され、簿冊の順が入れ替わっている。これらは全て②撮影後に行われた変更であり、清男が晩年、病に倒れるまで、「日記」の浄書だけではなく整理作業そのものを継続し続けたことが分かる。
- (17) 例えば、No.16の作成年は1891年と位置付けられ、翻刻版の『留岡幸助日記』でもそのように取り扱われているが、実際には1894年と推定される。同様に、No.79は1900年ではなく1899年、No.216は1915年ではなく1918年の間違いであろう。その他、明らかに作成年を間違えて整理番号を付したと思われる簿冊にNo.268がある（表3参照）。
- (18) 原本番号に付された枝番号を見ると、例えば、No.75, 114, 118の枝番号は2から始まっている（枝番号1は省略）。一方でNo.94, 130, 135, 136, 150, 156の枝番号は1から始まっている。これに対し、No.145, 146, 148, 149では枝番号なしの簿冊と、1から始まる枝番号をもつ簿冊が併存している。またNo.135, 137には0から始まる枝番号が付されている（135-0が存在するのは家庭学校所蔵の①原本のみ）。
- (19) 例えば、No.51は原資料にタイトルが存在しないが、マイクロ版では直前のNo.50の簿冊タイトル「第三号 監獄学記」の続編として「監獄学記 第4号」とのタイトルを付している。同様に無題のNo.52には直後のNo.53のタイトル「第五号 監獄研究録」を流用して「監獄研究録」のタイトルが付されている。また続くNo.54の原資料には幸助による「第五号」のタイトルがあるが、撮影作業者は「監獄学日記 第5号」とタイトルを付している。一方、原資料にはタイトルが付されているにも関わらず、「無題」とされた簿冊も多い。これら正確さを欠いた情報は登録台帳の書誌にも引き継がれ使用されており、利用時には留意する必要がある。
- (20) 『同志社大学人文科学研究所の50年』1994年、71頁など。
- (21) 例えば、安形静男「『留岡幸助日記』全五巻 矯正協会」『東京保護観察』第4巻第292号、1979年4月、7頁。井上勝也「書評『留岡幸助日記』全五巻」『刑政』第90巻第4号（通巻第1640号）、1979年4月、88～89頁。同「『留岡幸助日記（全5巻）』留岡幸助著」『犯罪社会学研究』通号8、1983年、221～224頁。天野武一「留岡幸助日記を読む」『罪と罰』第16巻第4号（通巻64号）、1979年7月、75～76頁。近年の研究書としては二井仁美『留岡幸助と家庭学校：近代日本感化教育史序説』不二出版、2010年、33頁など。

- (22) 同調査は共同研究の代表である野口道彦氏とともに実施した。また北海道家庭学校博物館長・佐藤京子氏（当時）には煩瑣な依頼にご理解とご協力をいただいた。記して謝意を表したい。
- (23) この理由について考察するため、②からマイクロ撮影時の作業痕跡を辿ると、整理 No.199（A-3リール；現 Reel No.13、最後尾所収）を撮影した際、フィルムが不足したため新たに別のリール（A-4；現 Reel No.10）にまたがって撮影を続け、残り 16コマを取めた。これに続けて No.200を（表紙、ノド、1 頁目の）3 コマ撮影した後、（理由は不明であるが）その撮影を中断し、続けて No.151から No.160を撮影している。整理 No.200については、これとは別のリール（B-8；現 Reel No.21）に改めて冒頭から終わりまで撮影されている。だがこの撮影時の経緯が③プリント製本版の作成や冊数確認の際に引き継がれず、上述の A-4リール冒頭の整理 No.199の残り 16コマと整理 No.200の 3 コマを同一の冊子として取り扱うミス（③ではコマの撮影順も入れ替えて後者を撮影したものとして製本している）が生じたようである。
- (24) ①と②③の間の原本番号の相違は次の 2 件のみである（枝番号の振り直しを除く）。
②③ No.17→①83-2に移動、②③ No.141および No.142→①両者の番号が入れ替わり（表 3 参照）。
- (25) 住谷磐『留岡幸助著作集』編纂と同和問題』『キリスト教社会問題研究』第37巻、1989年 3 月、506頁。

表 3 「留岡幸助日記」簿冊一覧

整理 番号	タイトル	作成年	作成者	備 考	冊 数
1		1887?			1
2	漫筆走記	1887/11/4	洛北 / 警醒堂主人		2
3	説教学大意	1886-1887	洛北 / 警醒堂主人		3
4		1888			4
5	漫筆走記 第 1 号	1888			5
6		1888		②③では「比叡山避暑録」としている。	6
7	漫筆走記 第二号	1888	丹波園部 / 警醒堂主人		7
8	漫筆走記 第三号	1888	丹州園部 / 警醒堂主人		8
9	罪囚書信 発来信状	1888			9
10	漫筆走記 第五号	1889/6/15	丹波園部 / 薇峰生		10

整理 番号	タイトル	作成年	作成者	備 考	冊 数
11		1889			11
12		1889			12
13	漫筆走記 第六号	1890/1	丹波園部 / 薇峰樵夫		13
14	漫筆走記 第七号	1890/3	丹波園部 / 薇峰樵夫		14
15	漫筆走記 第八号	1890/8	丹波園部 / 薇峰樵夫		15
16		1894-1895		⑤ 第一巻では1891年 の記事としている (192-199頁)。	16
17		1902/7-9		①では欠番 (1975.5.6 付で No.83-2に移動)。	17
18		1891/5/14			18
19		1891/9			19
20		1891/5			20
21	羈旅漫録	1891/9/23-11/20			21
22		1891/3/17- 1893/12/21			22
23		1891			23
24	漫筆走記	1892/1/8			24
25	看守服務心得	1892		活字の規則原本。	25
26	漫筆走記 第九号	1892	薇峰樵夫		26
27	罪囚書信 発来信状	1892/5/17	薇峰樵夫		27
28		1892/6/1			28
29		1892/10			29
30	羈旅漫録	1892/12/21-1894			30
31		1893/6/2	薇峰樵夫		31
32		1893	薇峰樵夫		32
33	漫筆走記	1893	薇峰樵夫		33
34		1893/12/27-1894		②③では「監獄視察」 としている。	34
35		1894			35
36		1894/7/7			36
37	慰心録 精神録	1894/5/11	薇峰樵夫		37
38		不明			38
39	第一号日記	1894/12/1-1895/4			39

整理 番号	タイトル	作成年	作成者	備 考	冊 数
40		1894/9			40
41	第二号日記	1895/4/15- 1895/10/10			41
42	第三号日記	1895/10/11- 1896/3/21			42
43	第四号日記	1896/3/21-5/8			43
44		1895/4/3-4/26		②③では「監獄視察 記第一号」としている。	44
45		1895/4/27-6/18		②③では「監獄視察 記第二号」としている。	45
46		1895/5		②③では「監獄視察 記第三号」としている。	46
47	第壹号 新約克州立感 化監獄視察日誌	1895/5/18	薇峰樵夫		47
48	翻訳 新約克州立感化 監獄規程	1895-5/21	薇峰樵夫		48
49	第貳号 監獄学日誌	1895/5/29	薇峰樵夫		49
50	第参号 監獄学記	1895			50
51		1895		②③では「監獄学記 第4号」としている。	51
52		1895		②③では「監獄研究 録」としている。	52
53	第五号 監獄研究録	1895/8/11			53
54	第五号	1895/11/1-11/16		②③では「監獄学日 記 第5号」としてい る。	54
55		1895			55
56		1895			56
57	第四号 監獄研究録	1895/8/2			57
58		1896/12/28-1897			58
59		1896			59
60		1896/10/8			60
61		1896/6/8		②③では「救児事業」 としている。	61
62	第六号	1896/2/3		②③では「監獄学日 記 第6号」としてい る。	62
63		1896		②③では「精神録 第 2号」としている。	63

整理 番号	タイトル	作成年	作成者	備 考	冊 数
64		1896/1			64
65		1897/5/1			65
66	第二号	1897/6/22			66
67	記録	1897/6/17			67
68		1894			68
69		1897/10-1898/1			69
70		1897?			70
71	第六号 監獄研究録	1898/1/19			71
72		1898/7			72
73		1898/2/6-1899			73
74	質問帳	不明			74
75		不明		冊子の中は白紙	75
75-2		1898/4/2-7/28			76
75-3		1898?			77
76		1899/1-6			78
77		1899-1900			79
78		1899/7-9			80
79		1899/7/7-8/24		⑤第一巻では1900年の記事としている(700-703頁)。	81
80		1901/2/21			82
81		1902/4/18			83
82		1901?/4/2-4/25			84
83		1901-1902			85
84	静岡県出張ニ就キテ 第一巻	1903/2/16-3/5			86
85		1903/5			87
86	静岡県出張ニ就キテ 第二巻	1903			88
87		1903/7/14			89
88		1903/8			90
89		1903/6/22			91
90		1903/6/24-8/15			92
91		1903/7/14-1904-2/4		②③では新調日付(見返し箇所)が撮影漏れしている。	93

整理 番号	タイトル	作成年	作成者	備 考	冊 数
92		1903-1904			94
93		1903/8/17			95
94-1	生徒行状録	1903/1/26-1/31	小塩高垣	生徒観察記録	96
94-2		1903/6/16	小塩高垣	生徒観察記録	97
94-3		1903/8/10	小塩高垣	生徒観察記録	98
95		1903/8			99
96	漫遊録 第九号	1903/9/21			100
97		1903/9/5-9/30			101
98		1903/9/13			102
99		1903			103
100		1903/10/24-11/9			104
101	Note No.5	1903/10/13			105
102	Note No.4	1903/10/3		②③では表紙が撮影漏れしている。	106
103		1903/10/6			107
104	漫遊録 第七号	1903/11/17			108
105	漫遊録 第六号	1903/11/9-11/17			109
106	漫遊録 第八号	1903/11/28			110
107	Note No.6	1903/12/20			111
108		1903/7/14-1904/1/19			112
109	第壹号 手帖	1904/3/15			113
110		1904/3/15			114
111	Note No.7	1904/4/19			115
112	Note No.8	1904/6/5			116
113		1904/7/11	薇峰		117
114		1904/8/17			118
114-2		1904/8/27			119
115		1904/9/6			120
116	Note No.9	1904/10/8			121
117	生徒行状	1904/10	坂井義三郎	生徒観察記録	122
118		1904/11/15			123
118-2		1904?			124
119		1905/1-2			125
120	第貳号手帳	1905/1			126

整理 番号	タイトル	作成年	作成者	備 考	冊 数
121	Note No.10	1905/2/15			127
122	Note No.11	1905/3/17			128
123		1905/3/19	井上良三	生徒観察記録	129
124	日誌	1905/4/19	好地由太郎	生徒観察記録	130
125		1905/4/21			131
126	Note No.12	1905/5/23			132
127	第一号	1905/8/25			133
128	第二号	1905/8/27			134
129	借入明細表	1905/3/1	家庭学校		135
130-1		1905/1/14-7/19	上野他七郎	生徒観察記録	136
130-2		1905/9/10-1906/5/16	上野他七郎	生徒観察記録	137
130-3	生徒品行録	1905/10/5-1906/9/10	上野他七郎	生徒観察記録	138
131	第参号	1905/9/19			139
132	No.13	1905/11			140
133		1905/12/4			141
134	聚材帖 感化教育材料	1906/1		裏表紙に「感化教育 及新平民」とあり。	142
135-1	書籍売却	1903/5-1905/10			143
135-2	書籍売上帳	1906/2			144
135-3	買物表	?/6/6-9/9		①では欠番（135-0 に移動）。	145
136-1	第一巻	1902/7/14-9/24	原真男	生徒観察記録	146
136-2	第貳巻	1902/9/24-10/22	原真男	生徒観察記録	147
136-3	第参巻	1902/10/22-11/12	原真男	生徒観察記録	148
136-4	第四巻	1902/11/12-1903/1/8	原真男	生徒観察記録	149
137-0	生徒操行誌	1906/7/21-10/22	西村茂次	生徒観察記録	150
137-1		1906/10/23-11/20	西村茂次	生徒観察記録	151
137-2		1907/12/2-1908/6/26	西村茂次	生徒観察記録	152
137-3	生徒操行録	1908/9/14-1909/6/14	西村茂次	生徒観察記録	153
138		1906/4/3-4/22			154
139		1906/5/2			155
140	感化教育之材料	1906/6/28			156
141		1906/8/31-9/18		②③では「巡回録」 としている。	157

整理 番号	タイトル	作成年	作成者	備 考	冊 数
142	No.14 第十三号	1906/9/7		①と②③ではNo.141とNo.142の簿冊が入れ替えられている	158
143	大久保逸事	不明			159
144	宿所帳	1906	家庭学校		160
145	処務雑録	?/9/11			161
145-1	三重県視察録	1906/9/19			162
146		1907/4/27			163
146-1		1907/4/27			164
146-2		1907/5/25			165
146-3		1907/7/14			166
146-4		1907/7/15			167
146-5		1907/7/17			168
146-6	大久保ト二宮翁材料	1907/8/1-1907/10			169
147		1907/7/7			170
148		1907/9/27			171
148-1		1907/10/16			172
149	大久保公日記	1907/10/31		③では148-1の巻末に採録。製本時のミスと思われる。	173
149-1		1907/12/24			174
150-1		1908/2/16			175
150-2		1908/1/8			176
151	相馬、宮城行	1908/4/5			177
152		1908/5/23			178
153		1908/7/30			179
154	報徳材料	1908/7/20			180
155		1908/12/12			181
156		1909/4/17	錦古里忠次	生徒観察記録。②③では「生徒観察」としている。	182
156-1		1909/7/13	錦古里忠次	生徒観察記録。②③では「生徒観察録」としている。	183
156-2		1909/9/21	錦古里忠次	生徒観察記録。②③では「生徒観察録」としている。	184

整理 番号	タイトル	作成年	作成者	備 考	冊 数
157		1909/2/2			185
158		1909/5/3			186
159		1909/6/20			187
160		1909/8/14			188
161		1909/8/26			189
162		1909/9/25			190
163	生徒行状視察録	1909/9	吉川亀四郎	生徒観察記録	191
164		1909/11/30			192
165		1909/11/12			193
166		1910/3/23			194
167		1910/5/4			195
168		1910/6/24			196
169		1910/1/24			197
170		1910/8/5			198
171		1910			199
172		1910/8/27			200
173		1910/9/16			201
174		1910/10/26			202
175		1910/12/5			203
176		1911/2/1			204
177		1911/3/15			205
178		1911/4/12			206
179		1911/5/1			207
180		1911/5/23			208
181		1911/6/15			209
182		1911/7/24			210
183		1911/8/8			211
184		1911/9/25			212
185		1911/12/11			213
186		1912/3/12			214
187		1912/5/18			215
188		1912/5/27			216
189		1912/6/5			217
190		1912/7/21			218

整理 番号	タイトル	作成年	作成者	備 考	冊 数
191		1912/8/30			219
192		1912/8/16			220
193		1912/4/4			221
194		1912/9/5			222
195		1912/9/16			223
196		1912/11/10			224
197		1912/11/13			225
198		1912/12/15			226
199		1913/3/15			227
200		1913/4/1		②③では2冊存在するとされている。	228
201		1913/4/9			229
202		1913/7/19			230
203		1913/10/22			231
204		1913/11/6			232
205		1913/11/28			233
206		1914/3/15			234
207		1914/4/30			235
208		1914/7/22			236
209		1914/9/17			237
210		1914/11/27			238
211		1914/12/1			239
212		1915/1/28			240
213		1915/3/23			241
214		1915/7/10			242
215		1915/8/23			243
216		1918/11/21-11/25		⑤第四巻では1915年の記事としている(61-68頁)。	244
217	日誌	1916/1/1		日記帳（一年分）	245
218		1916/3/19			246
219		1916/5/26			247
220		1916/6/20			248
221		1916/8/2			249
222		1916/10/8			250

整理 番号	タイトル	作成年	作成者	備 考	冊 数
223		1916/11/23			251
224		1917/2/28			252
225		1917/4/23			253
226		1917/7/1			254
227		1917/10/26			255
228		1917/12/1			256
229		1918/2/14			257
230		1918/3/3			258
231		1918/3/23			259
232		1918/6		日記帳。②③では「俳句日記」としている。	260
233		1918/5			261
234		1918/10/13			262
235		1918/10/25			263
236		1918/10/29			264
237		1918/11/2			265
238		1918/11/7			266
239		1918/11/12			267
240		1918/11/18		②③では “What is home without children?” としている。	268
241		1918/12/4			269
242		1918/12/13			270
243		1919?/3/5			271
244		1919/4/1			272
245		1919/5/19			273
246		1919/6/3			274
247		1919/10/28			275
248	大正九年 懷中日記	1920/1/1		日記（一年分）	276
249		1920/1/1			277
250		1920/2/6			278
251		1920/4/4			279
252		1920/5/17			280
253		1920/6/25			281
254		1920/2/29			282

整理 番号	タイトル	作成年	作成者	備 考	冊 数
255		1920/8/9			283
256		1920/11/1			284
257	大正十年 日誌	1921/1/1		日記（一年分）	285
258		1921/1/12			286
259		1921/3/6			287
260		1921/5/5			288
261		1921/7/1			289
262		1921/9/13			290
263		1921/12/22			291
264	Pocket Diary	1922/1/1		日記（一年分）	292
265		1922/4/16			293
266		1922/8/7			294
267		1922/9/20			295
268		1916/10/11-11/12			296
269		1923/3/24			297
270		1923/5/22			298
271		1923/9/1		1 頁目に「大地震の 日此日誌を革む」と 記す	299
272		1923/12/8			300
273		1924/1/1		日記（一年分）。②③ では「日記」として いる。	301
274		1924/2/28			302
275		1924/8/11			303
276		1924/11/5			304
277		1925/1/1		日記（一年分）。②③ では「日記」として いる。	305
278	Pocket Diary 1926	1926/1/1		日記（一年分）	306
279		1925/6/21			307
280		1926/6/20			308
281		1926/10/1			309
282	昭和二年 日記	1927/1/1		日記（一年分）	310
283		1927/2/18			311
284		1927/11/15			312
285	Diary	1928/1/1		日記（一年分）	313

整理 番号	タイトル	作成年	作成者	備 考	冊 数
286		1928/10/15			314
287	Diary	1929/1/1		日記（一年分）	315
288		1929/2/25			316
番外1	大塚素氏伝記材料目録	不明			317
番外2		不明			318
人名簿 A		不明			319
人名簿 B		不明			320
人名簿 C	サナブチ分家人名簿	1918			321

註：（１）「整理番号」は同志社人文研複写版を基準とし、各簿冊の特徴や諸版の整理状況を備考欄に注記した。（２）「タイトル」は留岡幸助が付したもののみとした。（３）「作成者」は留岡幸助の筆名（警醒堂主人、薇峰樵夫）および幸助以外の人物の場合のみ記した（空欄は留岡の作成）。（４）「備考欄」の①は「日記」原本（北海道家庭学校蔵「留岡幸助手帖」）、②は「留岡幸助日記・手帖」マイクロフィルム版（同志社大学人文研蔵）、③は②のプリント製本版（同志社大学人文研蔵）、⑤は『留岡幸助日記』全五巻（矯正協会、1979年）を指す。